

八十路を目前に・・・・・・

＝最後の締め括りを＝

なぜか、八十路を目前にして、昔日のあの日、その頃が、あれこれと思い浮かぶ。腕白であった時代を共に過ごし、やがて散り散りに別れ、それぞれが自分の至らなきを補い、多年にわたる努力を積み重ね、一人前の社会人として認められた。やがて、時が経ち、最前線からの離脱が始まった頃だったと思うが、懐かしい旧友達との再会が始まった。それが一堂に会すと、忽ちにして無礼講とばかりに「おい」と呼び交わし、名も呼び捨てにした。さらに、当時の愛称も飛び出す、といった実に荒っぽい男達だった。これ即ち、中高一貫校で、男子校卒特有の＜無遠慮＞が許されるムードだった。つまり「旧交（旧情）を温める」には、荒っぽい手段の方が、手っ取り早いと思うからに違いない。

それにつけても、寿命というのは、非情なもので、この間、一人、二人と無理矢理、まるで堅いスクラムから引き剥がすようにして、仲間をあの世に連れ去った。今は亡き彼らとは、積もる人生雑話が残っていたのに、年に一度きりの再会である。語り尽くせずにいた悔しい思いが、今もなお胸の奥に重く沈んでは、浮かんでくる。彼らにせめて＜楽しい土産話を持たせてやりたかったよう・・・・＞と叫びたい思いだ。「鎌倉をゆっくり案内するから遊びに来いよ」と約束していた彼だが、【お前が早く来なかったからだ】と、思い出すたびに責められているが、現世では無理だ。

世はまもなく【男社会】という言葉も禁句になり兼ねない気運であります。生きている間に、こうまで変化するとは思ひもしなかったことです。ついては＜最後の男っぽいクラス会＞を打ち上げたいと思うのですが、如何でしょうか。草葉の陰の彼らが＜やれーやれー＞と声援を挙げているような気がします。どうせ遅かれ早かれ、彼の地で再会できることですから。因みに広辞苑という辞書には「80 歳に手が届くと、再び子供のようになる」とありました。それこそ、この際、童心に返って最後を締め括るべく、「別紙・記」の日程で「熱海の会」を举行したいと思いますので、「この指、止まれ」でご参集ください。

平成 26 年 師 走

幹 事 一 同